



= 1
3178



二
3178
卷

明治元年戊辰初秋



小幡篤次郎 著

天地異地序

孔子の怪力亂神をうろくしとせぬを以て是後也
の天の又その怪力亂神をうろくしとせぬを以て是後也
よも留めざるは今この冊子に天地異地と題

一人の想像を契りてとて編せざるは
件を原より取集め翻譯して學ぶ公にしては
少なり其奇を著し幻域に及んば其奇を折るは
多敷き大なる余亦其奇を折るは
を桂きとて天地異地と題するは

天地異地 序

蓋て此の解する所の乃ち予の必竟此を以て
 而て此の解する所の乃ち予の必竟此を以て
 白濁阿の由に解す一事を略し一予の予
 抑も世より不存の事受地を以てその理ある事
 其の固より不之説とすまは是れその見慣れ
 中ありて其の受とハおれをさるるありと亦て
 解るる事なり阿の怖るる事阿の火の燃え水の凍
 是日物なり昇るる日没するの足換はれを以て
 怖れぬ事なり其の勢を以て遇はる事斯る事

阿のハ何れとあるを以て評はるる事なり初
 あるは何れを以て又初とあると其の事なり初
 くと信すやたはる事なり考へて其の事なり初
 る世のおもひまゝの由に怖るる事を以て解る
 信す或は解るるに道徳とてその道徳を以て
 寸解する事なり大の愚昧の所を以て以て之を以
 るの事なり其の事なり其の事なり其の事なり
 神の事なり其の事なり其の事なり其の事なり
 の理なり其の事なり其の事なり其の事なり

書中より抄譯とるりのなり

一此書中幾里と云ふものハ英國の一里にて我
十四丁四十二間二寸八分又當る今此を我里
法に改るときハ奇數を生し却て讀む人ハ不
便あらんらるゝ故恐れ暫らく彼里法ハ従ふ

天變地異

目錄

雷避の柱の事

地震の事

彗星の事

虹霓の事

九日同時不出たる事

三月並び照る事

流星並小火の玉の事

陰火の事

目錄終

天變地異

小幡篤次郎 纂輯

雷避の柱の事

大古の識者あき時代ふハ雷と惡しき神の叫び
 と唱へ人々恐を怖きしものあるがふらんき
 んと云ふ人世小出て後ハ斯る惑を説くものも
 なく此災を避る道具も出来し人の幸ひ限りか
 一ふらんき人ハ亞米利加合衆國の人ふて世

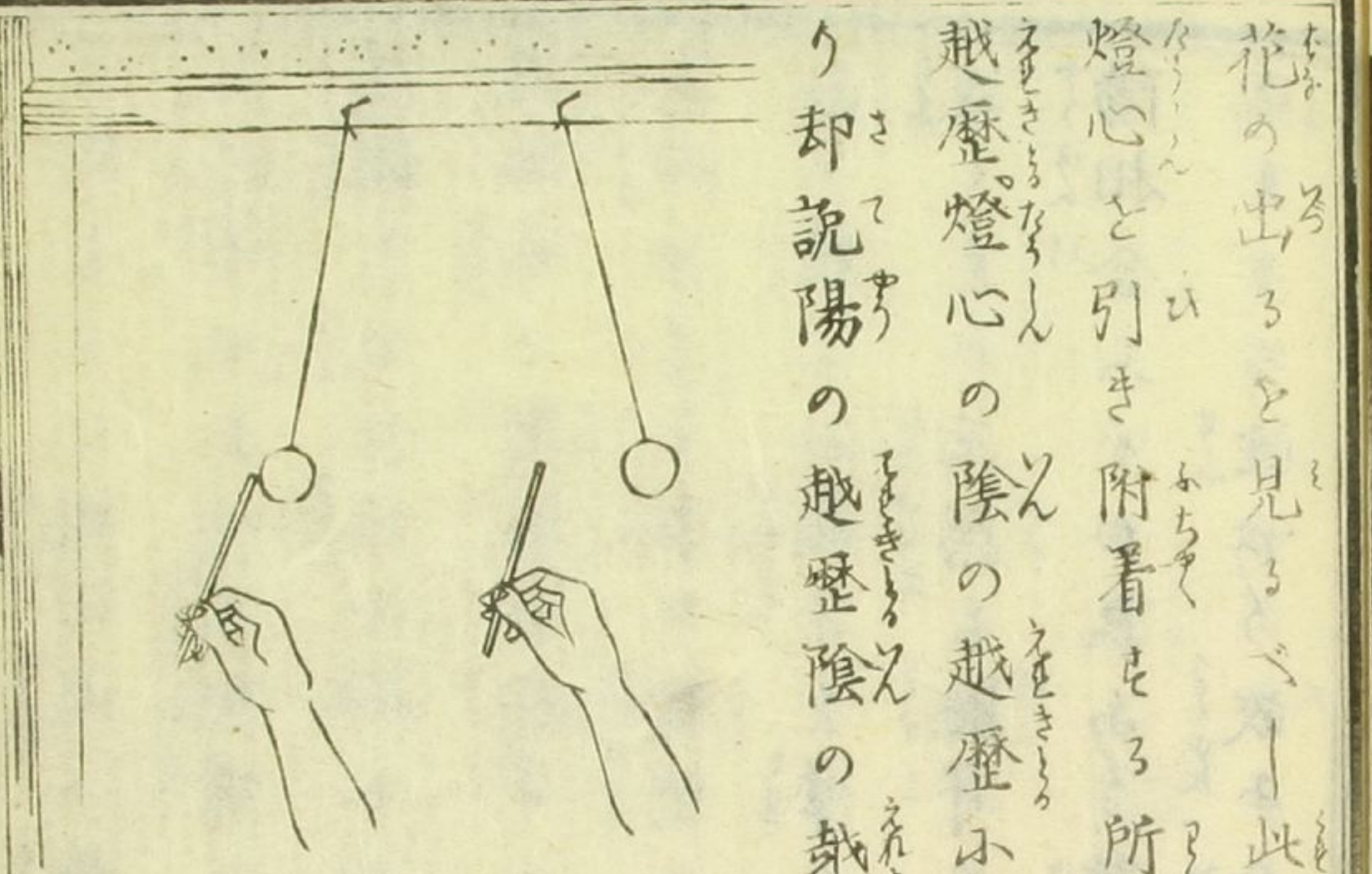
天變地異

小名高き英雄ふるる年少の時より諸學志を
 潜め殊小越歴の學問小秀て興義を極めし
 電も雷も皆越歴の所作ふらんと思付き訖度工
 夫を廻らし彼千七百五十二年我延享元年六月
 小至り雷雨の起ると待ち紙鳶を空中小放ちた
 る小雲間の越歴糸を傳り種々の試験小上せ
 ける小聊も尋常の越歴小異ふることやきを發
 明せり歐羅巴の學者も之と聞傳へ又同く試
 験しとる小全くふらんまきまんの説は相違ふ

し世の説一変し電ハ越歴の火花ふて雷ハ陽
 の越歴と陰の越歴と
 合せんとせるとき
 脉一ツの間小二十八
 萬里の遠路と馳
 せりゆ空の氣
 還小其行跡の空
 所と塞がんとし
 響と發せと云ふ



小極さうきょくより元来越歴もとをこえりとハ天地間の萬物ばんぶつ具もハ
 了したる一種いっしゆの氣き小こて萬物ばんぶつ皆みな多少たうしやう小こ此氣こゝろを持もて
 ざるハハ一ひと琥珀こくわくと硝子びんごころと小こ最も多おほく人ひとの躰かみ中ちゆう
 小こも此氣こゝろ具もりたる證あかし搥うハ試し小こ白しろき紙かみを三さん
 重おもく或あるハ四重よんじゆう小こ疊たかと暫しばしの間ま火ひ小こて暖ぬめ板いた或あるハ
 疊たかの上うへ小こ置おき手て早はやく爪つめ先さき小こて六む七しち度ども摩こり燈あかり
 心こゝろの如ごとき輕かろきもの一ひと邊へ寄よせハ燈心あかりん忽たちち紙かみ小こ
 附つ着くべ一ひと全ぜんく紙かみの越歴こえり人身じんしんの越歴こえり小こ感かん動どうさき
 たる由よし也なりあり暗夜あんや小こ之を試しさハ爪つめ先さき一ひと火ひ



花はなの出でるを見みるべ一ひと此こゝろ即すなはち越歴こえりの火ひ花はなあり其その
 燈心あかりんを引ひき附つ着くる所ところ以もつ紙かみ小こ起たりたる陽やうの
 越歴こえり燈心あかりんの陰かげの越歴こえり小こ合あもんとをりガ由よし也なりハ
 却さ説せつ陽やうの越歴こえり陰かげの越歴こえりとハ琥珀こくわく小こ起たりたる
 越歴こえりと陰かげと一ひと硝子びんごころ小こ起たり
 了したる越歴こえりと陽やうとを之を
 と試しむる法はうハ圖ずの如ごとく
 山吹やまぶきの樹心じゆしん小こて小こき王お
 と造つくり絹糸きぬいとを鴨居かみかどよ

天壤地異

り釣^つり下げ琥珀^{こくろ}或ハ樹脂^{じゆし}と摩^まり越歷^{えきり}と起^{おこ}す之^{これ}
小^ち近寄^{ちかよ}せお玉^{たま}馳寄^{ちよ}りて之^{これ}と附^つ着^くき暫^{しば}りて
復^{また}離^{はな}れ元^{もと}の位^ゐ小^ち歸^{かへ}るべし既^も小^ち離^{はな}れ後^{のち}ハ再^{また}び
琥珀^{こくろ}或ハ樹脂^{じゆし}と近寄^{ちかよ}るとも避^さけて附^つ着^くるを
是^{こゝ}雨^{あめ}おぐり陰^{かげ}の越歷^{えきり}おま^まバ相^あ嫌^{きら}ひて引^ひりさる
あり然^{しか}る小^ち硝子^{びやうし}と摩^まり越歷^{えきり}と起^{おこ}したるものと
近^{ちか}くお玉^{たま}忽^{たち}ち馳寄^{ちよ}りて之^{これ}と附^つ着^くるべし是^{こゝ}陰^{かげ}
陽^{やう}相^あ合^あふが由^{よし}あり斯^かく越歷^{えきり}ハ陰^{かげ}陽^{やう}相^あ合^あせん
とるもの性^{せい}りり故^{ゆゑ}お合^あへバ靜^{しず}よりて頭^{かしら}おれを

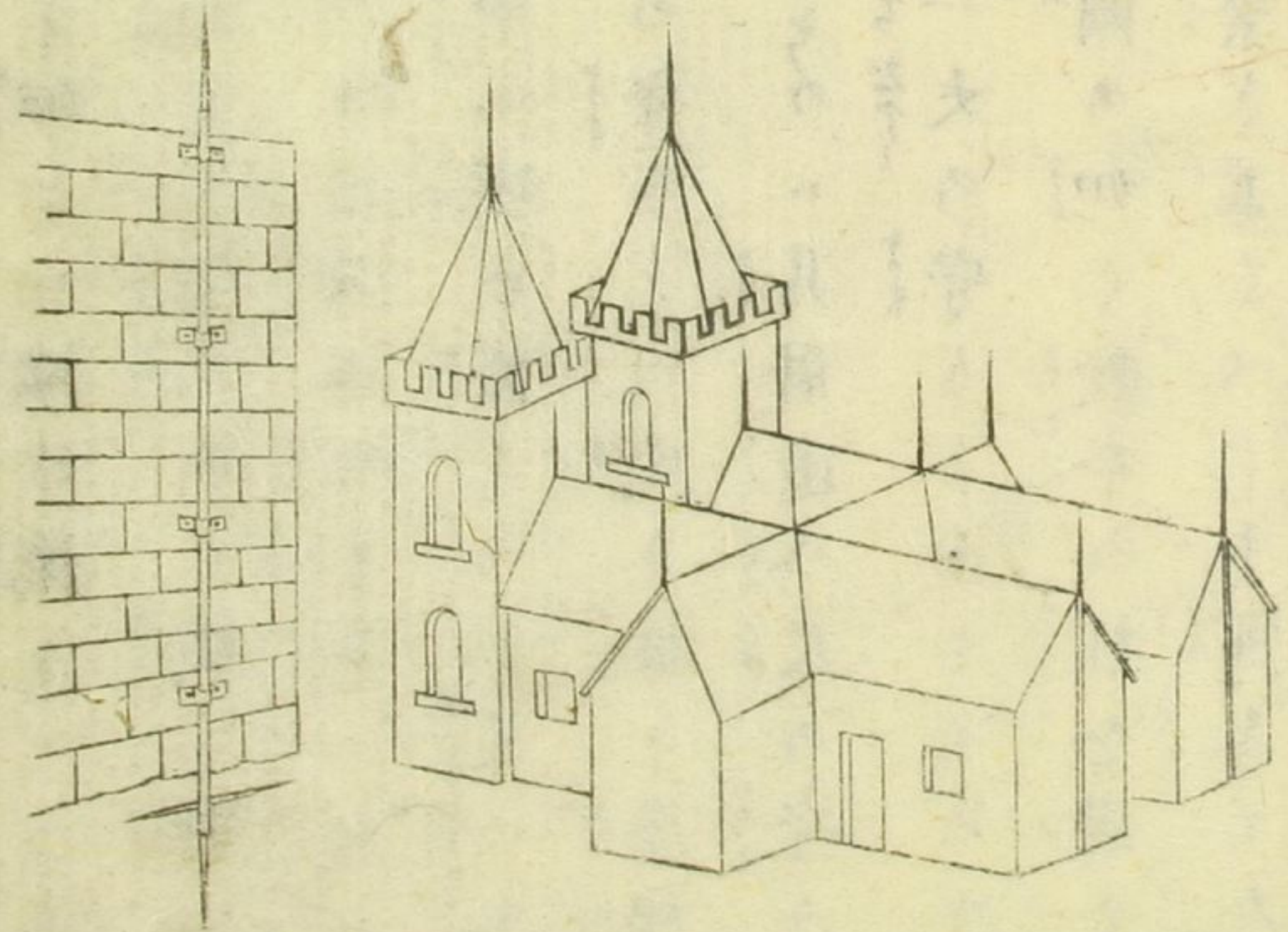
離^{はな}るをバ動^{うご}ひて合^あせんを此^{こゝ}理^り合^あより陽^{やう}の越^え
歷^きと起^{おこ}したる雲^{くも}と陰^{かげ}の越歷^{えきり}と起^{おこ}したる雲^{くも}との
間^まハ越歷^{えきり}の移^{うつ}り通^{とお}ふことりり或^{ある}ハ陰^{かげ}の雲^{くも}り
陽^{やう}の雲^{くも}お移^{うつ}ることりり或^{ある}ハ下^{しも}お移^{うつ}るべき雲^{くも}お
くし直^なく地^ちに傳^{つた}るることりり是^{こゝ}雷^{かみなり}撃^つの起^{おこ}る
所以^{ゆゑ}おて其^{その}速^{すみ}ハ脉^い一^{いつ}の間^まハ二^{ふた}十^{じゆ}八^{はち}萬^{まん}里^りと行^いく
ものあり斯^かく光^{ひかり}ハ神^{かみ}速^{すみ}ある小^ち音^ねハ唯^{ただ}脉^い一^{いつ}の間^ま
小^ち二^{ふた}百^{ひやく}間^まと馳^{ちよ}るもの由^{よし}あり光^{ひかり}の速^{すみ}ハ算^{さん}用^{よう}おへ
らざるものありて雷^{かみなり}の落^おと落^おざるを知るの法^{はう}

たり先電を見し時より雷と聞きて脈と押へ一
 二と數へ三四とふき七八百間の鬼より来る
 ものと知るべし故に光を見て同時小音を聞く
 その小なりざれば恐るゝ小及むを又越歴ハ物
 小よりて傳り難きと易きとの差別あり金類
 炭水雪生物火焰烟湯氣の如きもの小ハ傳り
 易く就中銀銅ハ最も傳り易し琥珀樹脂琥珀
 硝子玉絹獸毛羽乾きたる木空の氣杯の如きも
 の小ハ傳り難し故に雷雨の時金箔を置きた

る柱又ハ金屏風の下総て大なる金物の下小坐
 るべかたを乾きたる木ハ越歴を傳へざるとも
 湿るときハ傳り易くふるや小高木の下小
 雨を避くべし若しや雷小撃きて死ぬ人ハ
 らバ澤山小水と既ぎ拭け手を胸板の上小加へ
 或ハ押し或ハ緩めて息を吹回し手術と施さバ
 蘇生むることありと云ふ右の如く物より越
 歴の傳り易きと傳り難きとあり或見てふ
 らんきりんハ工夫を盡し雷避の柱と造り出

けきバ之ガ為人命を助け家藏を守り恩澤世小
 及べること際限あり此柱を造る小ハ銅を第一
 とは色ども價貴きを以て尋常鉄より造るもの
 多し前ハ大なる金物の下小坐ると戒め爰ハ
 ハ雷避のため鉄或ハ銅の柱を造ると云はる人
 の不審を招くべし元來此柱を建る主意ハ雷を
 避るるため小形を雷を引寄せ善き導きりのよ
 り速小地中散り余所の災を救ふためあり先
 建てんと思ふ屋根の上小圖の如く尖りたる金

の柱を建て四尺許り
 屋根より高く上
 四尺ハ黄金或ハ白金
 小て鍍金をべし左ふ
 くバ錆附きて越歴傳
 る難し尖の所ハ一
 本は造るも何れ或ハ
 二三本小造るも何れ
 柱の太ハ徑り六分位



のもの小造るべし餘り細きハ溶け流るゝの患
 あり此柱ハ上四尺の所より継目なく腕と壁へ
 繋ぎ留め下ハ地中ハ入り三又ハ今も其一枝ハ
 必む水や或ハ湿地の中へ埋め置くべし又一本
 の柱ハてハ遠方より守りとい成り難し屋根
 より高きこと四尺のものを其周邊八尺の守り
 となり五尺のいのハ一丈の守りとあるものな
 り故ハ大厦の上ハ圖の如く數本の柱を建て
 其間を太き針金よて繋ぎ置くべし手輕ふるた

め木柱と建て屋根より上の所を金鍍の銅小造
 り継目なく鉄の鎖を附け遠く水中ハ沈むるも
 のつらきとも用をか難しへねちや國ハ志人と
 まつくの塔とて有名のものを一が往昔より
 數度の雷撃ハ遇ひ頗る破損せしりとも此柱を
 建し後ハ災を被ることありとや又普魯士國の
 ぐろがと云ふ所ハ火藥庫ありて彼千七百八十
 二年我天明二年雷ハ撃きたまきども此柱の利徳
 小よりて災ハ羅らざるを得しり「ぶれを志ヤ」の

火薬庫ハ此柱ふきゆ忽彼千七百六十七年我明
和四年雷撃小遇ひ三千餘人の命と亡ひたり又
彼千八百三十年我天保元年英國の人をよとん
氏の工夫ふて三千餘艘の船へ此柱と装置しよ
り十一年の後功驗著しけきバ政府よりてとと
ん氏へ金三千磅即ち我九千兩の大金と恩賞せ
り云ふ

地震の事

地震ハ人の能く知るる山變ふて其の根源知り

難きものふとども今より二千三百三年前即ち
我孝安天皇五十八年又當り希臘國小忽ふさご
らさと云ふ大學者たりて地の底小雲を醸し電
と發せり斯る震動あるふとんと説けり其後
彼千六百一年我慶長六年日耳曼國ふさるち忽
りと云ふ識者出て地震ハ地の底に數多の大ふ
る窪たりて其一つハ水と充ち又其一つハ硝石
硫黄杯の如き燃るりのりりて互に通ひ水を煖
め湯氣を蒸せり發るものと説けり又彼千六

百八十六年我眞享三年

英國の「もんこふ」人とい

る小生れさる「もんこふ」

と又一人ハ同國の人ぶり

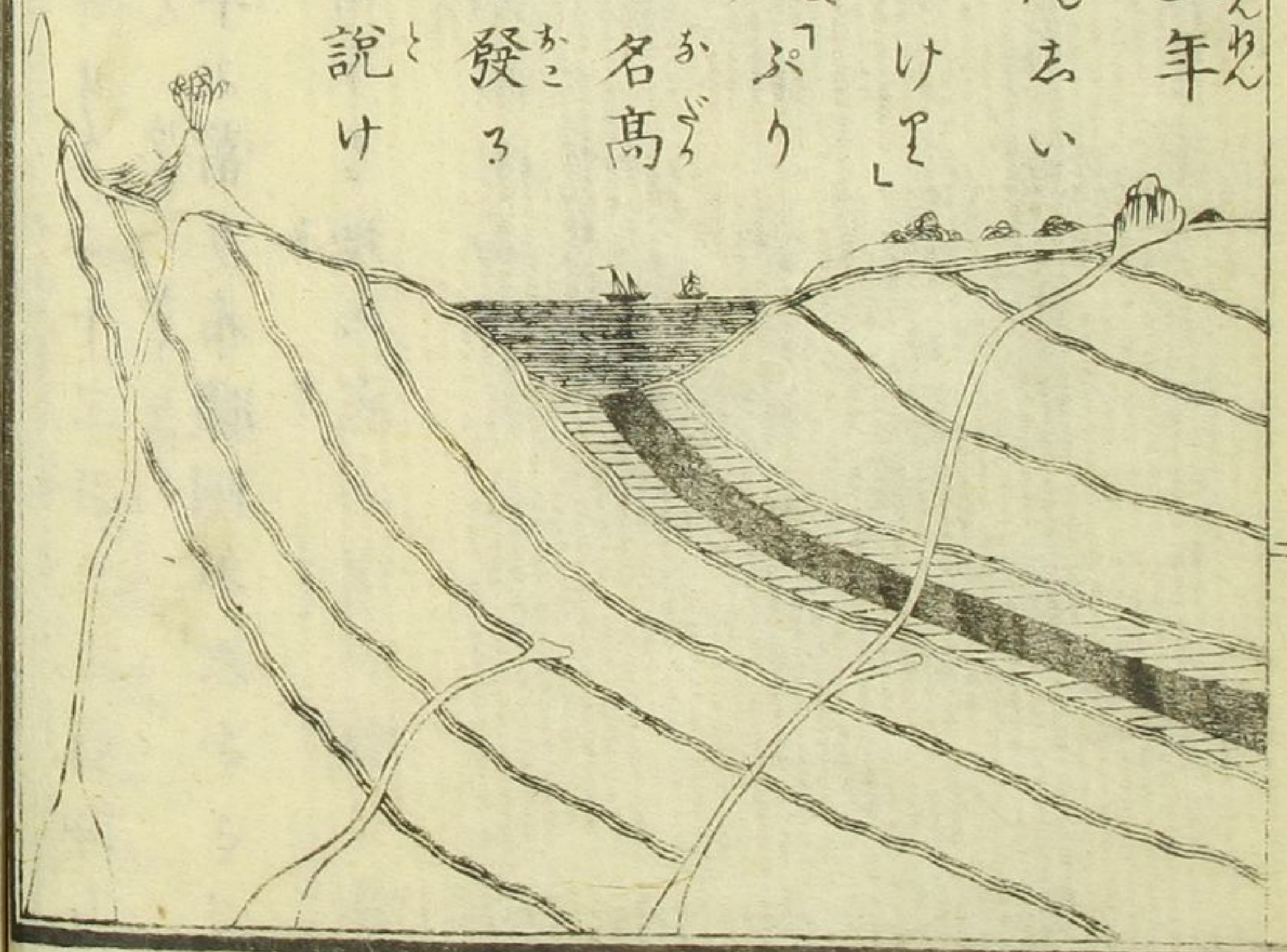
「もんこふ」二人とも名高

き學者ふるが地震の發

ハ越歴の所為ありと説け

「斯大古より種々

様々の説ありども



近代の發明ふて地の底ハ一面の穴あり小岩の

上皮を被り其上ハ土地を載き人の住所とふ

り此上皮小隙ありて水漏れ火の中へ流る入り

し月の蒸さきて湯氣とあり積て出るといれど

も出口なく之が爲震動を發すと云ふ信ふる説

あり地震の災ハ強ち震動の強弱ふりて其の

震法の模様小より強きも災の輕きなり弱きも

災の甚しきなり即ち其の模様四通りて左右

小動くなり上下小動くなり抗るなり旋るなり

此四の内小て旋を地震ハ強かゞざも恐るべ
 きものあり大槩一度の地震ハ脈の六十度打つ
 間を過ることあり折重て震動をることあるが
 由名小稀小ハ長き震動小逢ふことあり地震の
 為田畠埋と家邸破と人畜死亡せしこと數知を
 ば或ハ一村の人畜田畠全く地下小陷しこと
 あり或ハ一國を埋めしことあり島おき所へ嶋
 と湧き海を變トて陸とあり陸を没して海とあ
 一殊更甚しきハ今より二千百五十一年以前我

孝靈天皇八年小當り「を
 まらや」と云ふ所地震へて
 土地人民全く地下小埋を
 り又彼七百四十二年我天
 平十四年亞細亞州小て地
 震のため村數五百餘り潰
 せ死人の數しきがとと
 ぞ其の後彼千六百六十二
 年我寛文三年即ち唐土の康熙元年清の聖祖即



位の年唐土小大地震有りて北京許り小も死人
の數三十萬人有り一と實小開闢以來の大地震
あり又唐土ハ我享保十六年彼雍正九年大地震
小て北京の死人十萬を越たりと云ふ又彼千
八百五十五年我安政二年小ハ日本國の江都小
大地震有りて都下大概破損せりと此年小ハ土
耳其國のぎろりさと云ふ所も全く毀ち歐羅巴
の中國小ても諸方破損せり斯く地震ハ人小害
有りともふまども我淺間嶽の如き烟を噴く山

世界中小三百餘り有りて地の心より湯氣を
導き大空小噴出さしむる由名億兆の人民安く
此世小居るを得たり火山ハ實小莫太ふる功
有りのみあきども唯稀小破烈を起し燃石を投出
し之がよも田島を埋め人畜を亡ふこと少ふ
らざされども不意小起るもの小何れもさきバ避
け難き小ありとを以太利國小り志ありと云ふ
烟を噴く山有り此山の麓ハ人家も數多有り
て繁昌の場所あり一が彼千八百三十九年我天

保十年の秋小至りおの山俄小鳴か始め父いき
 が間止まさりー小或る日農家の小供兄弟ふて
 井より水を汲み庭の草木
 乾て枯きんとまると救を
 人と立出て兄ふるまの瓶
 と下せー小水を得ざきバ
 怪て更よこれを試とー
 小尚不初の如ーこハ井の
 途中小遮るまのくあふ



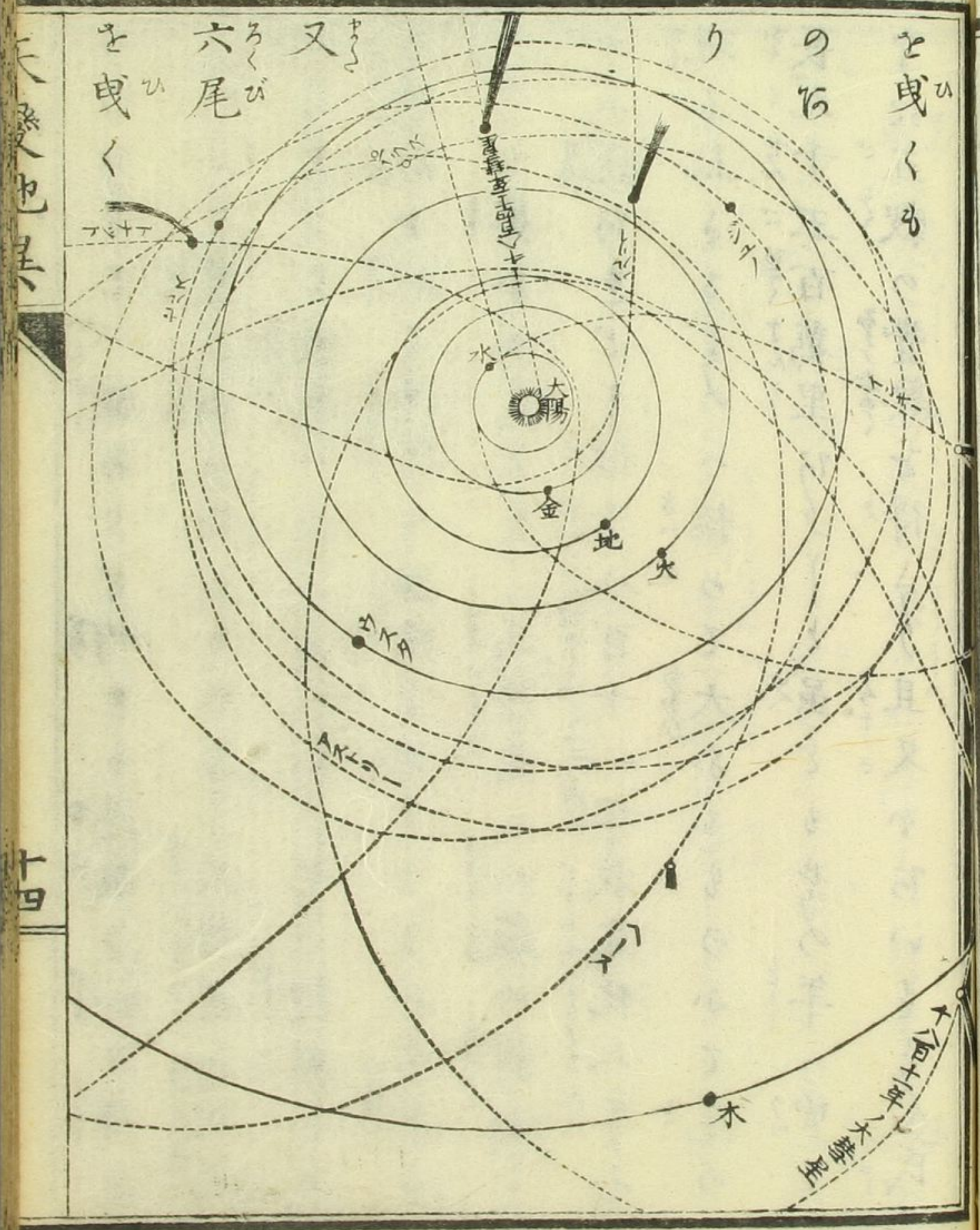
らんと妹ふるまの兄を手傳ひ瓶の底小石を附
 け再度井の中へ下しける小亦一滴の水を見ざ
 きバ大小驚き家小歸り母へ斯々の事ありと物
 語らんと内小立入り母の居ざると見て跡は残
 ーある食事杯仕舞ふりち黒烟四方小塞がり大
 砲の音とも覺しき響聞へこハ何事やと驚く所
 へ両親の聲外小聞へけきバ馳寄までこの硫黄
 臭きハ何事ぞや息止りて既小死んとせりと云
 ひも終らむ父聞ひて先日より山鳴て今日いづ

きの井も水乾き山の破烈迫き小竹り急ぎ荷物
を取片附けよと云ふ終小早くも妻子と共ふ
ぶると云ふ城下へ行き弟の家小至り未ど時を
移さざると小山より火焰を噴き燃石を投出し麓
の在所皆地下小埋まりと斯ることより考ふ
大地震火山の災ハ一ヶ國或ハ一ヶ村の難儀とハふ
きども元と天より億兆の人民を救そんとめ設
けらきたる月のふきバ心ある人々之が火免天
を怨むることありと云ふ

彗星の事

彗星の數ハ六百許りも有りもハ一して七十六
年目小顯るるも有り四年目小現ハるるも有
り或ハ二千年を経て出るも有り六百の星皆夫
々の期限有り全く彗星ハ日輪を周り動く星の
一ッ小て其の日輪の側小廻り来る時刻ハ自々ら
定り有り猶不燕の春分小来て秋分去り又來
春小渡り来るガ如一大古ハ此星の出るを見て
或ハ禍災の前兆とあり或ハ瘟疫の前兆と一

方ありども恐れしものなり當時ハ世の中大小開
 け千万里の遠方をも見るべき望遠鏡を造り出
 一之を以て天文を窺ふ由名彗星の尾ハ湯氣の
 如き薄きものにて星の体も殊の外薄きものと
 云ふ其證據ハ星の体を透き通し遠き星の光
 を見るべし尾小至りてハ格別輕きものにて或
 る天文家其の掛目を算し出せしハ二三目位
 もありべしと云へし彗星のりち体ありて尾
 きものあり或ハ尾ありて体なきものあり一尾



もの有りて一様ありど何きも湯氣の如き薄き
 ものふて透き通りたるものなり又彗星ハ光明
 強けきども熱氣ハふきそのありき證據ハハ
 寒暖計を以て其年の温度を測りたるハ平年と
 少しも異なることなり又彗星ハ凶歳の前兆と
 云ふ説ありきども彼千八百十一年我文化八年ハ
 現をれたるものハ極めて大なるものふて尾の
 長九千五百万里ありと雖ども其の年ハ曾て
 かり五穀の豊熟を得たり且又「阿いもらん」氏

の説ハ太古の世界大洪水ありハ彗星の地ハ
 近づき水を引たるより起りいと云へども此年
 の彗星ハ正しく大洪水の時ハ現れし一星あり
 小之がため洪水も出でされハ彗の説信をふ
 足らむ萬一彗星の地ハ觸るこせりも前
 云へる如く非常ハ軽きりの由恐るべきふ所
 らを況してや天ハ廣大無邊なるものふてその
 大空と地の如き些少のもの轉び行くも數の極
 りたる彗星の往て又回るも萬々相觸るの恐

天竺地異

一四

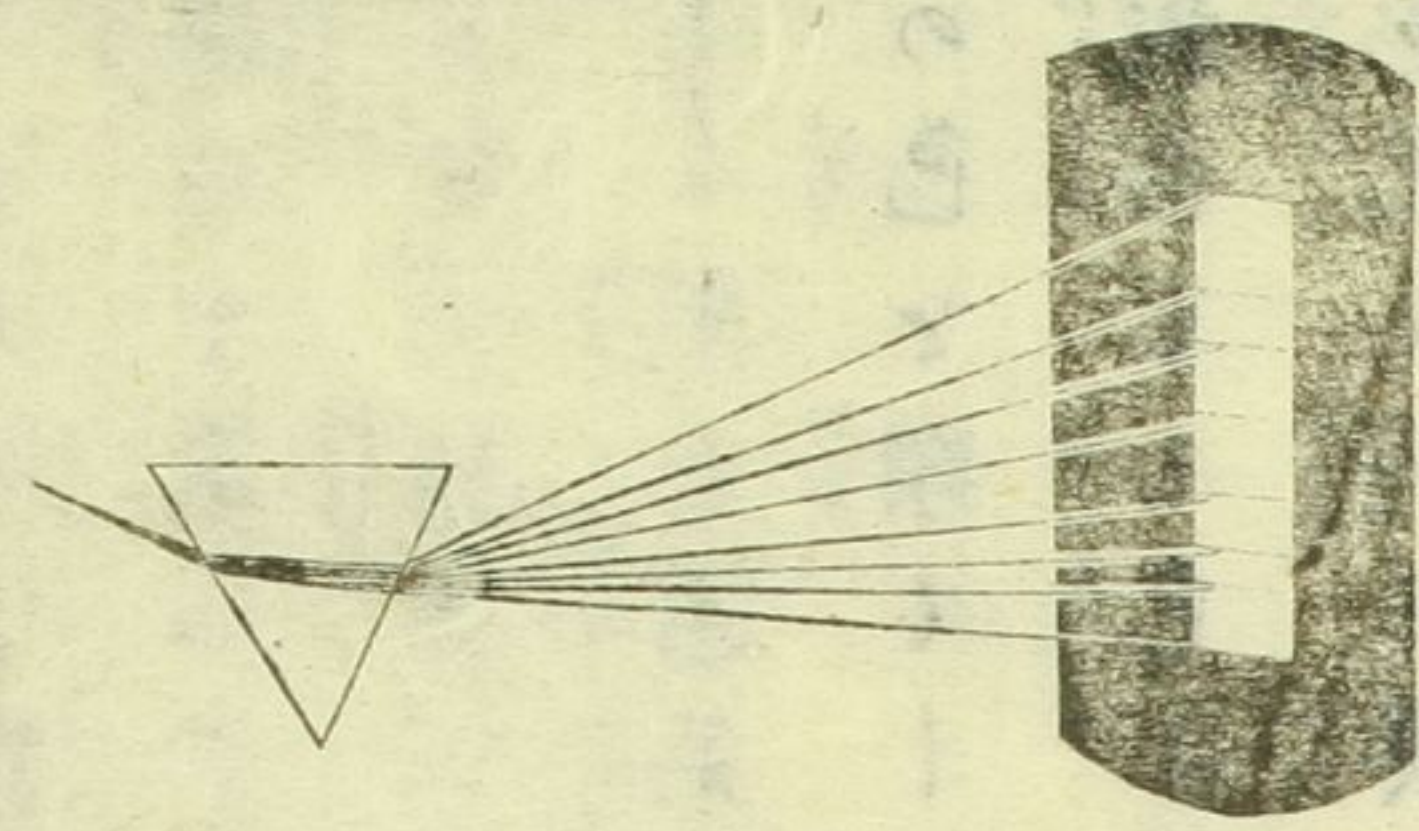
か一恰も千万里の大洋小五六枚の木葉を浮む
 るが如し誰う其の相觸るると恐るるものなり
 ん或天文家若しや衝當ることもしり人々と勘
 定して數小比べ説きたるを見れば其の衝當ら
 ざることの慥あるハ二億八千一百万小してそ
 の衝當るべき恐るるハ唯一ッありと云へ左
 何をハ彗星の現るるも恐るるべきものなり
 ども

虹霓の事

古昔唐土小てハ虹の隲るを陰氣陽氣を冒すの
 兆と唱へ女中權臣杯の盛ある小比べたること
 あり是全く物の理を究めざるより斯る惑いと
 説きしものあり虹の隲るハ村雨のとき小限り
 朝小ハ西小隲り夕小ハ東小見
 ゆると定り自然の理合より
 起るものなり何れも怪む
 き小なり今此理を説く人
 とその不當て心得置くべき



筒條ニツケ第一ハ光の物小當りて折る理合
 第二ハ光の七色小分るの理合なり光の物小
 當りて折る理合ハ誰も知ること小て女中
 の映鏡と持て照し合ハさるハ乃此理小基き
 小ものなり後小もてる鏡より来る光り前の鏡
 小映り夫より折きて我眼小入れバこそ後の姿
 も見るべき道理小き却説此理合より考へまバ
 村雨の水滴と前小もてる鏡と定め此鏡日輪よ
 り来る光を受け我眼小投げ返その理合も合点



色第四と綠色第五と藍色第六と紺色第七と桔

由くべし次小光の七色小分る理合ハ五六寸
 許りの三角形小製したる硝子と
 持て天窓戸を閉したる部屋小入
 り戸小小き穴を明け日光の輝と
 容き之と斜小件の硝子へ受け小
 バ日輪の光り分きて七色とふる
 べし色の色の次第と下より數へ
 第一と紅色第二と橙紅色第三黄
 色第四と綠色第五と藍色第六と紺色第七と桔

梗色とを此七色ハ固よ

り日光の本色あきども

碎けて見へざるの斜

小斯る硝子へ透き通る

光の道筋曲りて本来

の色と頭をいたるなり虹の

彩色も七色ふて此硝子小透き通りたる

彩色と何も異ふることなく右の次第あき巴村

雨の筭へ難き水滴答斜小日輪の光と通く夫よ



り折きて人の眼小投げ交るもの七色の彩色を

具へ美麗小見ゆるも自然の道理あり又朝ハ

西小見へ々ハ東小騰るの理合ハ日輪を後の鏡

小壁へ村雨の水滴と前の鏡小比べふバ朝夕と

も日輪と背小負ひて虹の騰るを見るの理あり

元来虹ハ環の形あきども下の方ハ地小蔽ハき

全体を現しきりれば誰も圓さものとハ思わざ

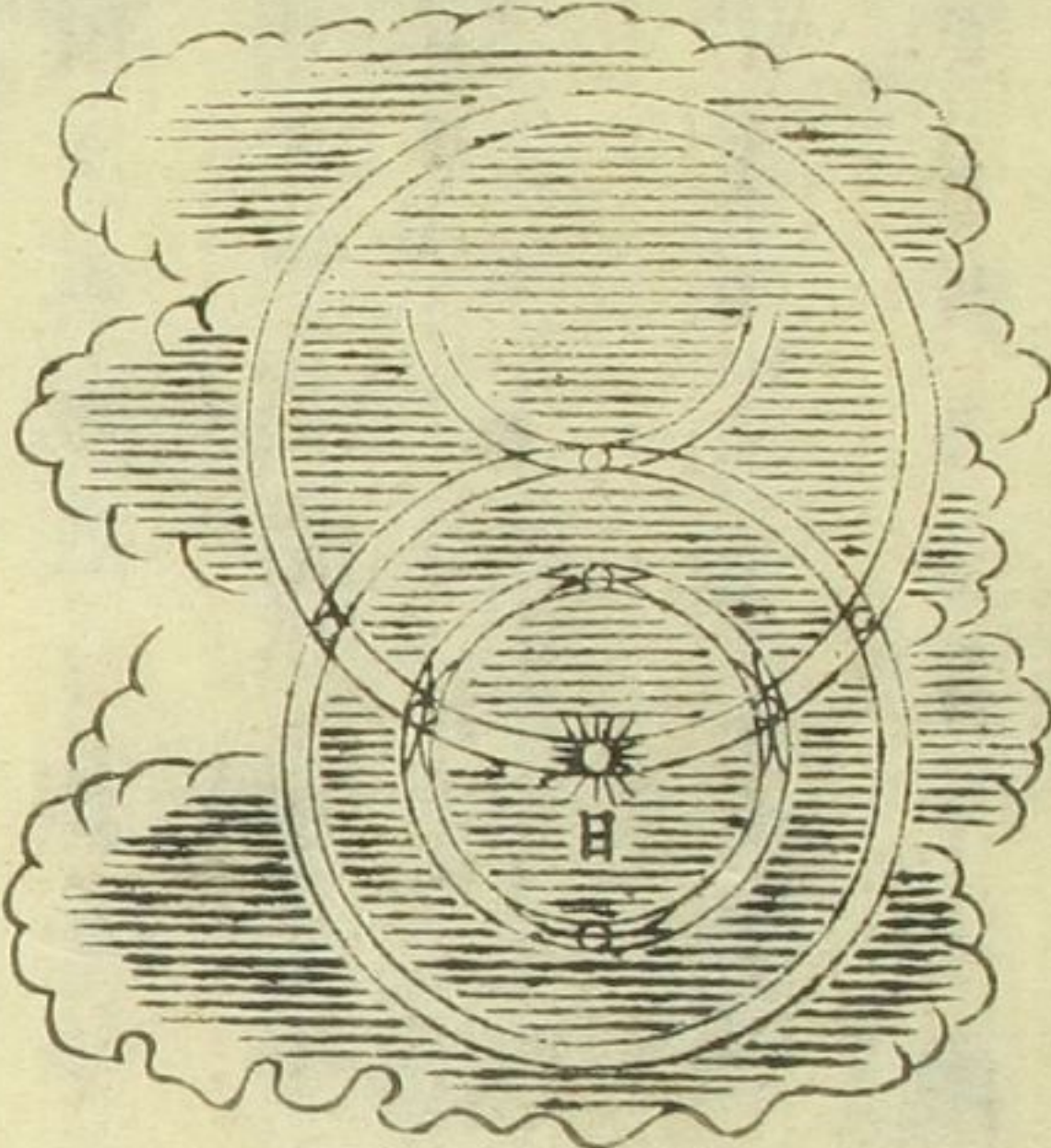
るべし試小船の帆柱或ハ高き丘杯小登り虹の

騰ると見かば稍や下の方と見るべし又虹ハ村

雨小限らど瀑布の水烟日輪より光を受け現も
るり又日光と背小負ひ含も水と噴き出
さバ目前小環状の虹と生むる一さいきと云ふ
人ハ天空のがとつ山中おて高三百五十間の絶
壁より間近く騰りたる虹と見ざる小全環鮮々
小輝き美麗と極め且環の中小己と始め同行の
朋友並ふ馬杯の象映りたる河見一とありと
云ふ

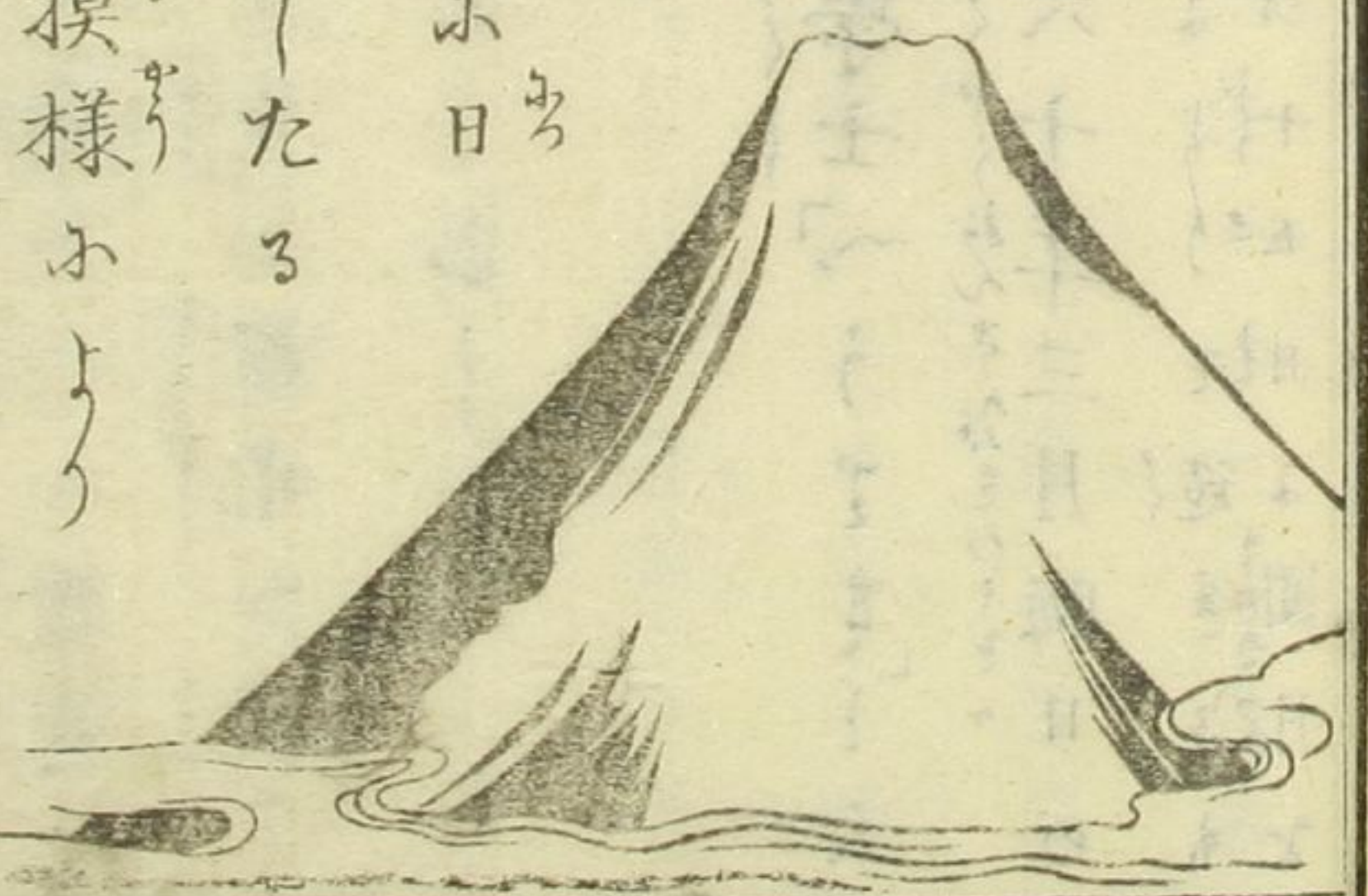
九日同時小出でたる事

大古唐土小堯と云へる帝ありしが此帝の時九
の日輪同時小天小輝き一と昇と云ふ弓の上
之と射落たりと云ふ説はきども固より信む
べき説小何れを日輪の數はるが如く見ゆるハ
間々あることおきども昇が矢の達るべき小も
何れを且射て墜るべき小も何れを爰小彼千六
百三十年我寛永七年日耳曼國の天文學者を
いまると云ふ人或る日輪の周邊小一ツの暈を
生とたるを見しが漸く二重三重とあり遂小四



重の暈を生ト暈の重りと
 所へ假の日輪を現そし
 真のものとは都合七つの日輪
 同時小天小耀きしを見と
 りと元來暈ハ空の水小日
 光透き通るより起るものふて猶不村雨の水滴
 日光を受けて投げ反も異なるなり斯く云ハ
 を空の氷とハ何ものあるやと問ふ人も何ら
 きガ空ハ高き程寒さ甚しきものあるハ富士杯

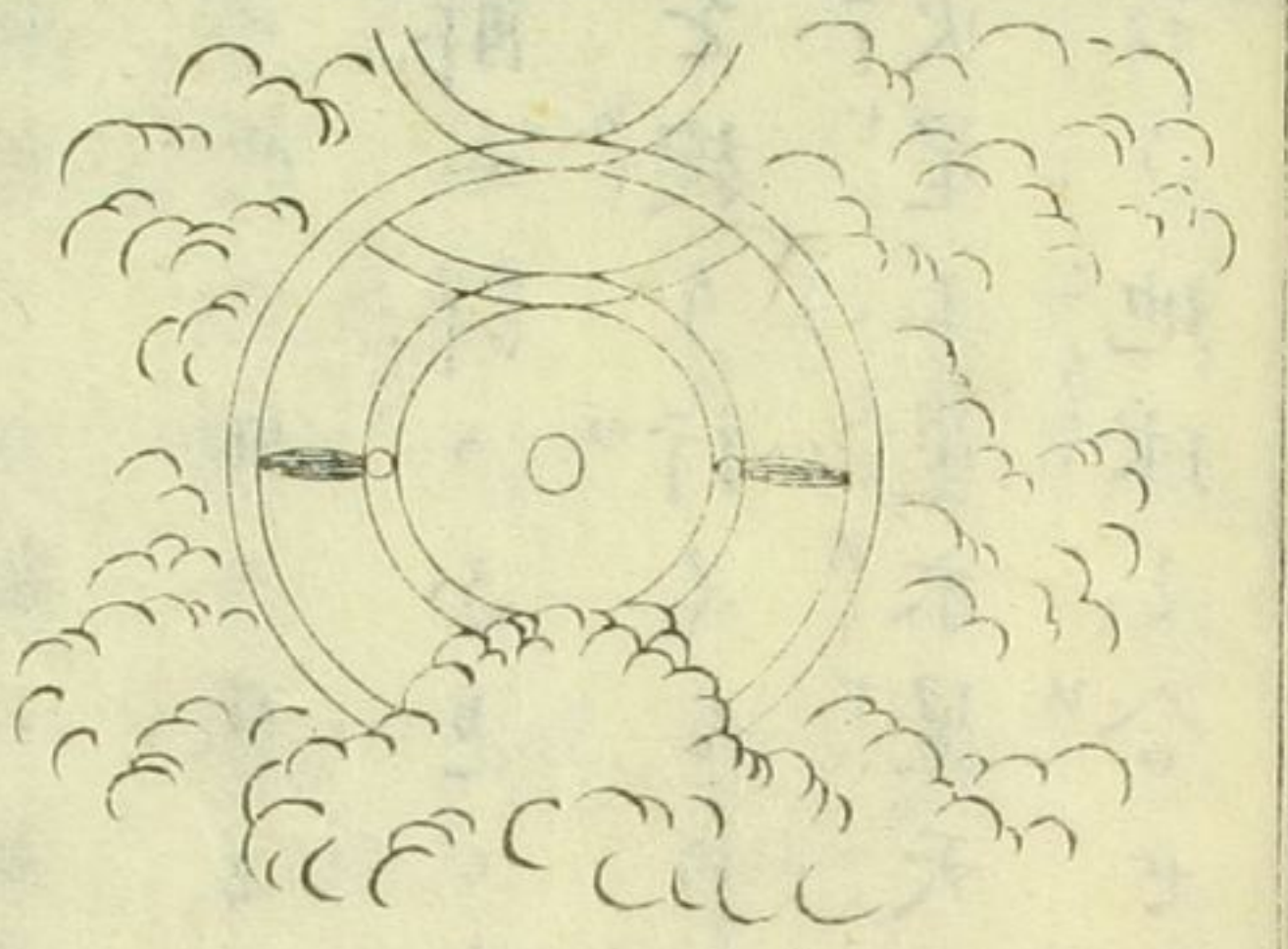
の如き高山夏ふも雪を戴
 くを見て合点行くべしそ
 の寒き所ハ雨と結ぶべき
 細やうある水滴騰り凝て氷
 とあり満面鏡の如く映ふ空小日
 光透通り環の如き光を現そしたる
 を日暈と唱へ来き其氷の模様ふより
 一の暈を現ハたり或ハ二重三重の暈を現
 ハたり此日小現をきとる暈ハ四重ふしそ



の環互ふ重りたる所ハ殊更玲瓏とるを以て互
小日光を投げ反り相映り也名恰も七ツの日
輪と掛け如くありたるあり猶不一ツの燈籠を
掛け其周邊ふ六面の鏡を置き互ふ燈光を映し
たるが如し何も不思議あることあり

三月並び照る事

中古比耳西亞の名高き天文學士「へうりま」と云
ふもの我萬治三年彼千六百六十年三月晦日の
夜の彼邦の曆我邦の曆の月替と違ひ十五日は造り
見よの月の周邊ハ一ツの白き暈
と生じ漸くして三ツの暈を重ね
中なる暈の兩側小二ツの月を現
ししたるを見たりと月暈の現
はるハ日暈と同一道理なり
を三ツの月同時に出でたるも七
ツ



の日輪大空の氷小映ふたると異なることあり
我邦倍小て何時の頃よりハ七月二十六日の夜
小三ツの月同時小昇ると云ひ傳へ月待るの習

ひかり全く此夜小當り斯る幾象を見しこと
るる遂に邦俗とありたるなり人

流星並小火の玉の事

地球の日輪の周邊を旋り全一年を経て再度元
の所へ回り来るハ同社の著述せる訓蒙窮理圖
鮮小詳々ふまゝ爰小贅言せむ却説日輪の周邊
を旋り行くもの獨り地球のミナトミ水星金星
火星土星木星天王星海王星として七の大ふる星
地球と合せ都合ハツのものをハ惑星とハ云

ふふり此外小七十三の
小惑星と前云へる
六百計りの彗星ありて
同トく周り行ものふる
ガ又此外小幾百萬と數
知まむ極めて小き星何
そて旋り行き唯地の周
邊を包める高四十五里許りの空氣の中を通り
行く間此氣と觸き合ひ光を放つものなり此即



世小流星或ハ火の玉杯と唱ふるものありこの
星ハ元來石塊ふきハ地杯と齊しく自己ハ光
なきものなきと其の周りに行く速極めて神速な
る由名空氣と觸き當り燧石の打火刀と觸き火
と放つの理合ふて光と放つものと云ふ遇小地
と間近く来るもの地の物を引く力小引り落
事ハ唐土の書冊小書記一某の國小墜る石
りりと云ひ歐羅巴の諸國小も奇物を集め置く
場所へ列ね置き諸人小見物させ我國小も諸方

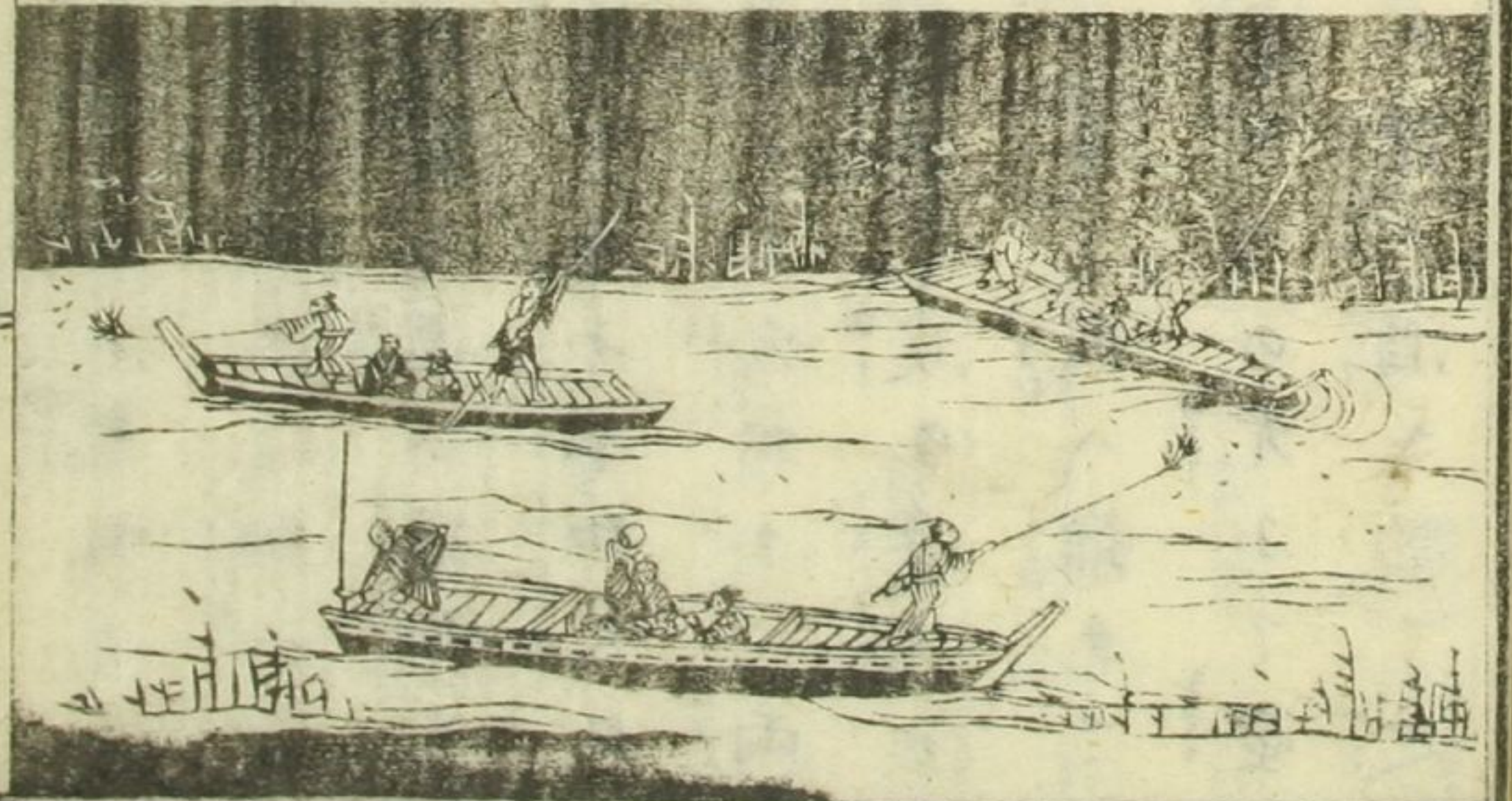
小墜り例りり余自ら其石を見よる人の話
しを聞く小尋常の石と異ふことあり様なき
ども少しく色黒く之と碎き吟味をせハ全地
上の石と質を異ふると云ふ九月十月の間小
此星を見るはと多きハ此星の周りに行く道筋丁
度此頃小至り地球の道筋と互小近く来るガ也
名かり

陰火の事

光り候きハ熱く熱けきハ光りハ一般の法ふ

光も熱くして光よく光りて熱くらざるも
 のり湯の如き何程熱くとも光よく螢火朽
 木生の海魚海水不知火陰火杯の類ハ光りきど
 も熱くらば此種の火ハ皆不を不ると云ふもの
 水素と調合一燐化水素とあり自然の理合を以
 て光を放つものなり同ト種類の中小ても螢火
 ハ王公貴人より婦人小兒に至るまで誰も愛弄
 せざるハあし殊小宇治川の螢狩ハ京洛間の諸
 人見物のさめ市とふを程ありと聞へト々嘗て

此を恐き一人は多派聞りて
 又朽木より光を放つらと何
 り終杯の朽ち腐れらるもの
 小最も多く怪しげなるもの
 又見ゆきども元と朽木あき
 バ兒童の輩暗所ハ持行き朋
 友小奇を誇るの具とらるもの
 又生の海魚殊小海老杯と
 暗所ハ持行きふ白き光と



放つべー又夜中海水と攪動らバ水小光あると
 見ると是全く水の光小ありを極めて細小
 る魚有りて水の動く小従ひ鱗鬣と振ひ揺動を
 るより起るものあり肥後肥前の海小不知火
 周防洋小平家の怨霊火と唱ふる火ありハ
 小から斯く小き魚の莫大小群集一波の浮沈を
 追ひ或ハ現ハを或ハ滅へ或ハ集り或ハ離れて
 奇怪の状を為しぬきと皆不を不の光小て螢
 火も同様のものあれ見物の諸人酒を酌て之

と樂むも幽趣を得るもの云ふべー狐火人
 魂杯と唱ふる陰火の類も亦同トく不を不の
 火あきども沼或ハ墓所杯の間小現を如何小
 も物凄く見ゆゆ人々畏きもの様小取沙
 汰一或ハ怨霊の火杯と唱へ婦人小兒ハ斯く火
 小行逢ふとれ震ひ恐甚きハ氣絶るもの
 有り実ハ氣の毒あることあり或る人夜深く
 沼を渡り物凄く思ひ折柄忽ち青き火の近く
 輝しと見たる小漸く我方へ寄り来バ惡き妖

怪の所業ありやと獨り聳やき行く程小之を捕
 へんと思ひ立ち急き歩あを進まめけきバ追おふもの
 ありて遁にろくろ如ごとく急き小遁かげ去さり我われ止とまきバ
 彼かれ止とり我われ行ゆけバ彼かれ行ゆきてこが動う静せを伺うふ様子
 あり愈い怒どり力ちからを極まめ追お駈かけ行ゆき一ひと忽たち滅まへ
 て痕あとを失うへり暫しばくありて遁にろ葦あし茅やぶを隔へて鮮あり
 小現こハ色いろ一ひと由よし忍しの此こ度どハ息いきを吞のみ身みを潜ひそめ間ま近ぢ
 く寄よりて急き小之こを襲おえんと決け意い一ひと徐ゆる小進こ進まり寄よ
 一ひと小火こ現あら然んと一ひと少すこし動うく様子ようあり一ひと益ますます沈しん

黙もく一ひと火ひの傍かた小歩こ歩あり急き小手こを舉あげて打うち落お
 一ひと見みきバ一ひと片ひとの燐りん化か水すい素そよて何なにも怪あやげふるも
 のふ一ひと畢ひ竟じやう前まへ小遁こげ隠かくれ一ひとハ
 自みづか己ぢの動うきより空くう氣きを動うく
 一ひと火ひも之これがため動うき一ひとその
 かる小後この度どハ静しやうと近ぢ寄より
 一ひと由よし忍しの空くう氣きを動うくさき火ひも
 之これがため小ぢりの居ゐ所ところを動うく
 さき之これを物もの又また譬たとへバ池いけ水みづの面めん小



浮ぶものつらと遷ふ水も飛入り之を捕へんと
 セバ其の物必む水に促られて先の方へゆれ我
 歸きバ亦水もつぎ我方へ来るべし然るを静ふ
 水と押し分け之を擱まバ容易なるべし空氣の
 動くも此と異なることかゝり元來不なることハ
 天地の間小具もなりたる六十八色の物の一つハ
 生物も多し草木杯も多少此氣を含まざるハ少
 し人も此氣をばらばら生命を保ち得るものも
 死して骨肉腐を土に返るとき此氣離れ水

素と云ふ亦六十八色の物の一つと合ひ前云へ
 る燐化水素といふなり斯る理より墓所杯ハ
 自然此氣も多し遂ふ怨靈の火杯と唱へ来り
 も種なき話ハつらとさきど元と不なる光
 ふれば螢火朽木と異ならど何ぞ畏るべしと云

天変地異 大尾

明治九年
一月二十九日
版權免許

東京
明治九年
一月二十九日
版權免許

